



Title	上級学習者に対する「会話」授業の試み
Author(s)	波多野, 吉徳
Citation	大阪大学日本語日本文化教育センター授業研究. 2014, 12, p. 33-47
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/50798
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

上級学習者に対する「会話」授業の試み

波多野吉徳

【要旨】

本稿は筆者が大阪大学日本語日本文化教育センター（以下CJLC）で担当している上級学習者対象の会話クラスにおける試行の報告である。具体的には直近の担当であった2012-2013年度春学期「上級会話」を対象にする。この授業は、研究留学生、短期留学日本語日本文化特別プログラム（以下メイプル）、及び他部局からの特別聴講生が受講した。

筆者は、日本語の習得が進んだ学習者の「会話」にとって必要な事は、論理的に話せる事と、自分の意思が聞き手になるべく意図通りに通じる事であると考えている。

この二つを日本語教育という観点から具体化すると、①日本語会話の構造の理解、②「敬語」の運用力の向上の2点を前提として、③実際に話す体験を積む事の3点を筆者は授業の柱だと考えた。

よって、本稿は、この3点についての筆者の実践の報告が中心となる。

I. 会話について

1. 1. 会話の定義

筆者は会話の授業を行うにあたり、まず会話とは何かについて考えた。最初に数冊の辞書の記述を見ながら、辞書ではどのように定義されているかを見ておきたい。

①二人あるいは少人数で、向かいあって話し合うこと。またその話。（『広辞苑』）

② 「日常生活において」用を達するための話のやりとり。（『新明解国語辞典』）

③ 二人または数人の人が話をすること。また、その話。（『明鏡国語辞典』）

④ 複数の人が互いに話すこと。また、その話。（『デジタル大辞泉』）

⑤ 「会話」は二人以上の人が集まって言葉を交わすこと。また、その内容をいう。

「談話」は「会話」のように、特定の相手を意識して行うのではなく、大勢の人が自由にうちとけて語り合うことにいう。（『角川類語新辞典』）

⑥ an informal talk involving a small group of people or only two ; the activity of talking in this way (“Oxford Advanced Learner's Dictionary”)

（下線引用者）

これらに挙げられている定義を妥当とするならば、会話とは相手があることを前提として、あまり多くない参加者が、言葉の「やりとり」をするものと考えられる。よって、筆者は、「やりとり」の方法を学ぶ会話の授業は、自分の意見・意思・感情などをどうすれば相手により的確に伝えられるのかを学ぶ機会だと考える。つまり、「自分の目の前に相手がいて、その相手と言葉のやりとりをする」ための方法を考える授業となるということである。

1.2. 上級学習者にとっての「会話」能力 ～「意思」を伝えるためには

上級学習者は、日本語の基礎知識（文法・語彙…）に加えて、ある程度日本（日本人・日本「文化」…）の基礎知識も習得していると考えられる。これを前提に、上級クラスの授業では、口頭で意思を伝えるために、「日本語母語話者（以下「日本人」）が好む談話展開」について、再確認する必要があると考えた。言語の種類によって世界の区切り方は異なるので、会話が言葉を使って行う行為である以上、学習者が、より「日本人」らしい会話を志向するならば、彼らの母語で行うものとは異なる談話展開を知り、それに従って会話する必要性が生じるからである。

授業で対象とする会話を、日常生活におけるあまり親密すぎない間柄の会話とした場合、話し手の課題は、自分の話す内容が相手になるべく自分の意図通り伝わることである。同じ内容を伝えた場合でも、話し手が、自分と聞き手が置かれている状況、つまり、時と場所、自分と聞き手との関係を正確にとらえ、その状況に合った会話ができるか否かで、聞き手への伝わり方には違いが生ずる。日本語での会話において、この点を司るものが「敬語」¹⁾である。よって、上級学習者にとって、「敬語」の知識と運用練習も必要になる。

上述のように、本稿では、「会話＝やりとり」と考えている以上、話し手が常に話し、聞き手が聞いているだけという固定したロールを演じているわけではなく、立場が入れ替わる。また、「会話」において「聞く」ことは決して受け身の行為ではない。聞くこと自体は受身的であるかも知れないが、会話における「聞く」は、話し手の意思（内容と感情）を受け止め、それに対する自分の考えを構築していくことである。そして生み出された考えを、今度は話し手として相手に対して表出するための前提である。よって、授業では、学習者が話す時間と同様に、聞く時間にも積極的な意味があると考える。そして、言葉の「やりとり」を繰り返すことで、会話を始めた時よりも、双方が「わかりあえ」²⁾れば、その会話は「いい会話」だったと言えるだろう。

II. 会話授業について

2章では、授業における実践について述べる。

2.1. 受講生の概要

研究留学生	8名	中国（女性）、イタリア（男性）、モンゴル2名（両名女性）、韓国2名（両名男性）、オランダ（男性）、イギリス（女性）
メイプル（MA1-3）	7名	日本（女性）、タイ4名（男性1名、女性3名） 台湾（男性）、ベトナム（男性）
同（MA4-6）	4名	オーストリア（女性）、ロシア（女性）、台湾（男性） イギリス（女性）
研究生他	2名	中国（女性）、韓国（女性）
合計	21名	（男性8名 女性13名）

2.2. 授業の目標

本節ではシラバスの記述を引用して、クラスの目標について述べる。

「上級会話」として、筆者の授業では、授業題目を「伝えることの難しさ」とした。これは、

学習者自身が、日本語を話す中で感じていることでもあるだろうし、また、授業担当者である筆者自身が、日々の言語生活の中で感じていることである。そして、授業の目標を、「このクラスの目的は論理的に話せるようになることです。つまり、自分の言いたいことを聞き手にわかるように話すということです。一方、自分の気持ちをなるべく正確に伝えるためには話し方にも注意する必要があります。人は感情を持つ生き物ですから、同じことを伝えるのでも、表現の仕方によって誤解されることもあるし、納得されることもあるということです。大きくこの二つに注意しながら話せるようになることがこのクラスの目的です。」とした。

2.3. 授業の構成

以上をもとにした授業シリーズの大まかな流れは以下の通りである。

①初回から履修登録確定まで

初回

- ・シラバスの説明を行う。補足資料を配布し、口頭で上述1. 2. の内容を説明する。
- ・クラス受講についての簡単なアンケートを書かせ、クラスで扱う敬語表現についてのクイズを考えてもらう。

2回目から3回目

- ・初回の敬語クイズの解答を使って、クイズを解く鍵、つまり、そのシチュエーションにおける留意点を説明する。
- ・日本語会話の構造について、日本語文の構造と関係づけて説明する。

②4回目以降

- ・敬語クイズについて一通り終えた後、『敬語』の一部を使って、上級学習者に必要と考えられる点について、説明する。
- ・映像資料を視聴し、内容について討論する³⁾。
- ・文字資料について、討論する。

以下、それぞれの内容について少し詳しく述べる。

2.4. 敬語クイズ

上述のように、第1回目の授業で、シラバスの補足説明を行った後、授業履修登録予定者の会話レベルを確認するため、6個の表現（いずれも敬意の表現に誤りがあるもの）を訂正するクイズを課した。以下に課した問題を挙げる。

クイズ 次の表現はどこか間違っています。正しいと思う話し方に変えましょう。

- ①先生、どうぞ推薦状をお書きになってください。
- ②先生、疲れているようですから、どうぞ座っていただけませんか。
- ③お客様、今の説明でわかりましたか。
- ④ご注文の商品は入荷の見込みがありません。
- ⑤このワンピースは年をとった人でも似合いますよ。
- ⑥先生、来週の授業、休まさせていただきます。

ここでは、問題①、依頼の表現について述べる。

学習者の作成した解答例を元に作成した説明資料を用いて、「依頼」という行動の持つ性質と、それに伴う表現使用の制限について考えた。以下が配布した説明資料⁴⁾である。

①先生、どうぞ推薦状をお書きになってください。

みんなの答え（少し、変えたものもあります。）二重下線はとてもいい。下線は少し直せばよくなります。

- I. 先生、推薦状をお書きになりませんか。
- II. 先生、推薦状を書いていただけませんか。8
- III. 先生、推薦状を書いていただけないでしょうか。5
- IV. 先生、推薦状を書いてくださいませんか。2
- V. 先生、推薦状を書かせていただきませんか。
- VI. 先生、推薦状を書いていただいてもいいですか。
- VII. 先生、お推薦状をお書きにもらえないでしょうか。
- VIII. 先生、推薦状をお書きになっていただけませんか。
- IX. 先生、推薦状をお書きになってくださいませんか。

①は自分の利益になることを他の人にしてもらうときの表現です。

では、まず「先生、どうぞ推薦状をお書きになってください。」がなぜ変なのでしょう。それは、推薦状を書いてもらうことは私にとっては利益がある（私のための）ことですが、先生にとっては負担になることです。それなのに、「お書きになってください。」という表現では、私から先生への（a ）を表すことになってしまいます。a は下の立場から上の立場にするものではないので、変なのです。

だから、「もらう」の敬語表現である「いただく」か「くださる」を使った表現にすればいいわけです。

この場合、注意しなければいけないことは「てください」です。「てください」はどんなときに（どんな場所で）使われているかを思い浮かべてください。先程、a と言ったことがヒントです。

（ ）

例えば、ATMなんかも、しゃべりますね。ATMに「キャッシュカードを入れてください。」と言われたら、カードを入れなければ、次のステップには進みません。つまり、「てください」と言われたら、言われた人には（b ）がなく、自分の希望（お金を引き出すこと）を実現するためには機械に言われた通りにするしかないので。つまり、「てください」という形の持っている意味はa であり、もう少し強い言葉を使うと（c ）であると頭に入れておいてください。だから、「てください」はあまり使わない方がよろしい。

「くださる」を使って「お願い」を表すには、「おVマスください」という表現を使いましょう。つまり、先生、推薦状を（d ）という言い方ができればよろしい。

先程b の話をしましたが、許可、依頼などの表現では、「相手に決定権を持ってもらう＝相手に決めてもらう」表現を使うことが大事です。この場合、みんなが作ったように、「～か」の形（疑問の形）を使うといいでしょう。こういう言い方をすることを「相手にお伺いを立てる」（＝相手の意見を伺う）といいます。

次に、この表現を用いて、「自分のための書類を先生に書いてもらう」ための会話には、どのような要素、要素の提示の仕方があるのかを考えた。その際も、学習者自身が会話例を作って

「自分のための書類を先生に書いてもらう」会話で考えるべきことは大きく分けて3つあります。

- ①用件を話すまでに何をしなければいけないか。

ちょっとよろしいでしょうか。

というような流れになります。以下は「はい」だったとして用件の会話に進みます。

- お時間ございましたら、お書きくだされませんか。

ここに提示した説明資料では、特に会話例という表面に現れたものの背後にある考え方（「文化」）を伝えることに留意している。なぜ、ある表現Aを採るのかは、偶然に決められているのではなく、（表現B、C…ではなく、）表現Aを採るに至る必然性があるからである。これを表面化あるいは意識化することによって、学習者が日本語の世界をより深く探求する契機になると考えるからである。

2.5. 日本語会話の構造の理解

現実のクラスがある程度の幅を持った学習者で構成されていて、特に、クラスに担当者の想定より到達レベルの低い学習者がいれば、彼らに対する配慮も必要である。よって、彼らの底上げを図ることで、上級クラスらしいクラス活動を行うために、60分程度の時間をとって確認している。

この項目の配布資料は「日本語文のシンタクスと日本語会話のシンタクス」である。内容は、日本語はSOV型の言語だから、その統語構造は文についてだけでなく、文の集まりである文章にも反映されているということを再確認するものである。2013年度春学期においては、まず、『N2読解スピードマスター』と『敬語』から、適当な例文を引用して説明した。配布した説明資料の前半節最後は、以下の通りである。

次は今までの文に比べると構成が複雑な文です。

敬語がこれほど体系的に発達している日本語は、世界の諸言語の中でもやはり特筆ものであるし、敬語について関心をもっている研究者も決して少なくないのだが、敬語の全体像を整理・体系化して述べた著作は、これまでいくらも出ていなかったのである。（『敬語』より）

これは、決して「敬語」が「いくらも出ていなかった」のではありませんね。だから、先程の下線部は、次のように書き換える必要があります。まとまりの最初と最後に注意すれば、だいたいの意味はつかめ、それぞれの部分の意味がつかめると、文のだいたいの意味はつかめる。

つまり、先程の文は

①敬語がこれほど体系的に発達している日本語は、世界の諸言語の中でも特筆ものであること

②敬語について関心をもっている研究者も決して少なくないこと

③敬語の全体像を整理・体系化して述べた著作は、これまでいくらも出ていなかったこと

の3つの部分から、成り立っていて、下線部分がそれぞれの部分の根幹です。もちろん、①でいえば、日本語について「どんな」を表している部分をとらえ（読み取り、聞き取り）、何の中で（何に比べて）「特筆もの」なのかをとらえられれば、①がよりわかることは当然です。②、③も同様です。

次に、部分と部分とが、どのような関係で結びついているかを知ること、よりよくわかるためには大切です。つまり、「～し」、「～が」を挟んで、3つの部分が関係していること。①と②が①+②の関係であり、①+②と③が、(①+②) ⇔ ③の関係であるとわかることが、日本語文としての、上記の文がわかることです。そして、重要なことは、この文全体の中で、著者が一番いい部分はもちろん③であることです。つまり、長い文であっても、文の最後が言いたいことの根幹だということに変わりありません。

以上の説明を踏まえて、次に、『N2 読解スピードマスター』にある手紙文を使って、日本語の文章の組立てについて検討した。手紙は書き手の意思を伝えるツールであるので、話し手の意思を伝える行動である会話と目的が共通であると考えからである。例文を示し、手紙の構造を以下のように説明した。

森田知子先生

拝啓

春分の候、森田先生におかれましては、お健やかに過ごしのことと存じます。

在学中、特に受験に際しましては、大変お世話になりまして、ありがとうございました。

昨年の今頃は、法学部と経済学部どちらを選べばよいか迷っていました。何度か先生に相談させていただきましたが、森田先生のご指導は、わたくしにとって、大変な救いとなりました。あのときの先生のアドバイスがなかったら、今日の入学式を無事に迎えることはできなかったでしょう。

近々、学校にご挨拶と近況報告に伺おうと思っておりますが、まずは、書面にてお礼申し上げます。

季節の変わり目ですので、ご自愛ご専一に。

敬具

平成二十二年四月十二日

大野木弘

(『N2 読解スピードマスター』より一部改変)

この手紙の構造は

相手の名前(横書きの場合 縦書きなら手紙の最後に 用紙の上に)

あいさつ①(定型 最初と最後でペア この場合「拝啓-敬具」)

あいさつ②(定型 バリエーションあり 相手の安否を聞く)

感謝

感謝の事情・理由(なぜ感謝するか。何が相手に対して感謝すべきことなのか)

用件と感謝

あいさつ③(定型 バリエーションあり 相手への気遣い)

あいさつ④(定型)

日付

自分の名前(横書きの場合 縦書きの場合も手紙の最後に 用紙の下に)

この構造を学習者に示すことによって伝えたかったことは、日本の「文化」(考え方・価値観)の表れとして、短い文面の中で、挨拶が繰り返されていることである。そして、用件を語る際に、感謝の言葉もまた繰り返されていることである。これらは一言で言えば、相手への気遣いであり、日本での対人コミュニケーションが、少なくとも規範としては、基本的に自己中心的なものではなく、相手の立場や状況を考慮して行うといった「文化」の反映であるということである。上述のように、手紙を書く事と会話が自分の意思を伝えるという同じ目的で行われる行動であるならば、手紙で用いられる型が、口頭(会話)でも同じように現れると考えていいだろう。よって、この「文化」を知っておくことが、学習者が「日本人」と会話を行う際にも

生かされると考えるからである。そして、配布資料を用いた口頭説明で、

このように（自分の馴染みが薄い文化に）違和感を抱くことが、ある文化をわかろうとする一歩です。せっかく日本語が使われているのが普通の社会にいらっしゃったのですから、実際に日本語母語話者たちがどのように話しているかに耳を傾けてみるのが、会話の力を伸ばすいい方法の一つです。

と述べた。授業をきっかけとして、日常的に「日本人」の生の会話に注意を向けるとともに、「日本人」との会話体験を積んで欲しいからである。

2.6. 『敬語』を用いた敬語使用における留意点の説明

筆者が「敬語」について、相応の時間を割くことには、二つの理由がある。

一つは、学習者のニーズである。上級学習者にとって「敬語で話すこと」は自然な日本語を話すことと同意である場合が多い。それだけ、彼らは、実際に日本で日本語を使って「日本人」とコミュニケーションをとる経験を積むと、日本語習得過程における「敬語」の存在の大きさに気づくということであろう。

2011年度秋学期の中級作文（筆者担当）で、敬語学習をテーマに作文を書いた学習者の以下のような表現が、この事情を的確に表しているので引用する。

私は国の大学で日本語を勉強していた時、先生に「です・ます形」だけで日本では外国人として十分生活できると言われた。でも、来日してからそれは不可能だと気づいた。それは直接に言われたのではなく、私を感じたものだ。例えば誰か立場の高い人と話した時、もっと敬語を使うべきだとよく感じたが、なかなか実行できなかった。そしてその人の表情や返事から私の話し方に欠点があったことが分かった。

日本人は先生であっても道を尋ねた人も私によく敬語で話してくれる。でも、私はそんな同じマナーで反応できないこともよくあるから、とても後悔している。敬語は大昔から日本の社会の隅々まで浸透している。だから日本にいるうちは外国人であっても大人として認められるためには敬語がとても重要だ。

二点目は、一点目の裏返しだが、日本語に関する知識と日本語運用能力との間にギャップがあることによる不利益は、上級学習者になればなるほど大きく被ることになる。よって、授業では、上級学習者の「リスクマネジメント」の一環として、「敬語」の基礎知識の応用と基礎知識から一歩進んだ情報を提供する必要があるからである。

「敬語」の使用における留意点については、授業の参考文献として挙げた菊池康人（1997）『敬語』（講談社学術文庫版）を用いた。周知の通り、『敬語』は「敬語の全体像を整理・体系化して述べた」著作であり、内容は多岐にわたるので、授業では、「敬語の人称暗示機能」、「対話の敬語の利用」、「尊敬語使用時に高めない相手」、「敬語回避」、「二方面敬語」について扱った。例えば、「二方面敬語」については、以下のような資料を用いて説明した。

敬語について④ 謙譲語②難しいこと

二方面敬語 自分が動作主ではない場合の謙譲語の使用

話し手から考えて、動作主と動作の受け手のどちらも高めるべき相手の場合 たとえば、

あ。あなたが先生を「ご案内してくださった」のですか。 の場合です。

この場合、この発話をした人にとって、「一番高めるべきなのは動作の受け手」である先生ですが、動作主であるあなたも先生よりは敬意のレベルが低くはあっても、高めるべき相手です。それは

「ご案内する」で「あなた（と私）からの先生への敬意^{*1}」を表し

「Vてくださる」で「私からあなたへの敬意」を表していることからわかります。

^{*1}敬意を直接表しているのは「わたし」ですが、この会話の受け手である「あなた」も当然、先生に対して、敬意を抱いていることが推測されます。

だから、次のような場合に注意する必要があります。それは、動作の受け手が身内^{みうち}などの場合で、たとえば、あ。の「先生」を「妻」に換えた

い。あなたが妻を「ご案内してくださった」のですか。 は間違いだと言うことです。

つまり、この文ですべきなのは動作主である「あなた」への敬意を表すことです。つまり、

う。あなたが妻をご案内_____のですか。 が正しい敬語表現です。
あるいは、

え。妻はあなたにご案内_____のですか。 としても構いません。

つまり、相手（動作主）への敬意を込めたつもりで、「Vしてくださる」「Vしていただく」を使うのは間違いだということです。ですから、

「お／ごVしてくださる」と「お／ごV（語幹）^{*2}くださる」とで、前者が謙譲表現であり、後者が尊敬表現であるということを混同せずに理解しておくことが間違いを犯さないために必要です。

^{*2}V（語幹）とは スル型の動詞、例えば「連絡する」なら、スルを除いた「連絡」（＝語幹：変化しない部分）に直接「くださる」を続けることです。普通の動詞ならマス形のマスを除いた物（＝語幹）に「くださる」を続けましょう。例：お読みくださる お書きくださるなど

謙譲表現は、動作主が自分であることが普通である。よって、ここで扱った動作手が自分ではない場合の謙譲語の使用は、日本語学習者にとって、それほど経験することではないだろう。しかし、筆者が、二方面敬語を学習項目として採り上げたのは、①上級学習者ともなれば、このようなシチュエーションに立たされることもあるだろうこと②「お／ごVしてくださる」と「お／ごV（語幹）くださる」のペアに見られるような、謙譲表現と尊敬表現とを区別することが、「敬語」を実際に使用する場合に、致命的な過ちを犯さないために必要であることを述べた

かったからである。

上述の項目の他に「確認」として、動詞の特別な形（いらっしゃる、まいるの類）と名詞の丁寧で改まった場で使用する言い方について問題形式で扱った。また、スピーチレベルについても言及した。授業参加者から彼らと日常的に接する自分たちと同年代の人達（チューターなど）との会話の中で、どのタイミングで、敬意を抜いた話し方をすればいいのかについてよくわからないとの声があったからである。授業では、あくまで私見であるが、以下のように述べた。

このこと（＝普通体で話すこと）は、みなさんがチューターの学生さんと話したり、今後、日本語母語話者と友達になろうとするときにも参考になることです。日本の人は基本的に受身なので、彼らが近づいてくるのを待つよりも、みなさんの方から近づいていく方が友達になるのは早いでしょう。「ですます」から普通体に変えるタイミングが難しいとは思いますが、「ちょっと早め」と考えていいのではと思います。私なら、初対面時に普通体で話されるのはさすがに「近づきすぎ感」があるけれど、3回目でも「ですます」で話されると、なんか遠い感じ、つまり、「友達になりたくないのかな／自分のことを嫌いなのかな」と思います。この感覚はもちろん人によるので、一般化はできないけれど、でも今、「タイミングがわからないな」と思っている人は、2回目に会ったときの途中から、変えてみればいいんじゃないかなと思います。

2.7. 資料（映像・文字）を用いた討論

ゴールデンウィーク後の第4回の授業から、テーマ討論のたたき台として映像資料を視聴し、それをもとに討論を行った。筆者の授業では意思を伝えることを授業の目的の一つとしたので、あるテーマについてクラスで話し合おうと構想した。しかし、2013年度春学期は上述のように特別聴講学生を含め22名（最終的に成績を登録したのは21名）の登録があった。すなわち、会話クラスとしては少々大きすぎるクラスになったわけである。そこで、次善の策としてクラスを各グループ最大6名の小グループに分けて、グループ内で意見を述べ合う形を採った。グループは固定せず、できるだけ毎回違う人と話せるように配慮した。また、時間が許せば、それぞれのグループでどのような話し合いを行ったかについて、クラス全体で共有した。

2.7.1. テーマ選択のための参考資料

テーマ選びのために、以下に示す参考資料を提示した。資料は大きく、映像資料（テレビ番組を録画したDVD）と文字資料（主に新聞記事）とに分かれる。映像資料の数字は何コマ使って扱ったかを表している。

映像資料

- ① “日本の大学はcool?” NHKBS “cool japan” × 3
- ② “「国際人」がニッポンを救う” NHK総合 “NHKスペシャル” × 4

文字資料⁵⁾

- ③ 「ヘイトスピーチ横行」毎日新聞2013年6月3日夕刊
- ④ 「コラム発信箱 語学力より大切なこと」毎日新聞2013年6月4日朝刊
- ⑤ 「世界一へ！本田、8人名指し「公開説教」」サンケイスポーツ2013年6月6日配信記事
- ⑥ 「東大 秋入学見送り」毎日新聞2013年6月19日夕刊

- ⑦「秋入学見送り 東大「環境整わず」2013年6月20日朝刊
- ⑧「留学生受け入れ 阪大、増加検討」同上
- ⑨「コラム坂村健の目 多様性こそが「善」」同上
- ⑩「ヘイトの現場から」上・中・下 毎日新聞夕刊2013年6月25日～27日
- ⑪「都教委が通知 特定教科書「使うな」」毎日新聞2013年6月27日夕刊
- ⑫「〈富士山ツアー〉有頂天 予約倍増、英語話せる添乗員も」毎日新聞2013年6月25日配信記事
- ⑬「富士山「世界遺産」登録で「入山規制」「観光客減につながる」と地元は反対？」
J-CASTニュース2013年6月24日配信記事
- ⑭「〔富士山世界遺産〕世界の富士、構成資産にぎわう」 @S 2013年6月24日配信記事
- ⑮「日本のイメージ 急変」毎日新聞2013年7月10日朝刊
- ⑯「記者の目〔女性の活用〕 パパ・クォータ制 導入して」毎日新聞2013年7月24日朝刊
- ⑰「コラム発信箱 為政者と歴史への責任」同上
- ⑱「記者の目〔過労死防止基本法〕 悲しみの根絶へ制定急げ」毎日新聞2013年7月25日朝刊
- ⑲「コラム発信箱 第2次安倍「復刻」内閣」同上

⑥から⑧は「秋入学」についての記事である。また③と⑩、⑪、⑮は「ヘイトスピーチ」についての記事である。④、⑤は②の関連記事として提示した。なお、⑨は直接的な言及はないが、「ヘイトスピーチ」の問題につながる意見として提示した。このように文字資料を提示する際は、テーマに対する理解を深めてもらうため、関連する記事を五月雨式に提示した。

提示した資料、特に文字資料は、2013年夏の日本を映し出すものとして、筆者が選んだものである。選択には筆者の主観が反映されているので、客観的状況全体を伝えるものではない。会話に限らず日本語教育の教材として使用する映像教材はどのようなものが適切かについては、小南（2011）にも指摘されているように、「授業担当者の良識や嗜好に任されているのが現状」だ。筆者の「良識と嗜好」は、日本の「良い面」とともに、「負の面」にも目を向けることである。これは日本を貶めるという意図ではなく、短い留學生活の中で、受講生が日本のいろいろな「顔」を見、知日家の卵として、帰国して欲しいと考えるからである。よって、これらの資料を日本が特別な国ではなく、自分たちの国と同じように、いろんな人たちがいる国なんだと実感してもらうために提示したのである。

映像資料を視聴する際には、以下に例を挙げるように、視聴のためのキーワード・論点等を示したプリントを配布した。

映像資料②

今週から「“国際人”がニッポンを救う」を見ていきます。

キーワードは 国際人 内向きな若者 価値観 リスクテイキング

見ながら考えて欲しいこと

- ①日本でいう国際人ってどんな人？
- ②留学するって どんな意味がある？
- ③（日本で／みなさんの国で）大学ってどんな存在？
- ④若者らしさってどんなこと？

⑤就職するってどんなこと？

⑥学問をする意味

また、この番組では若者と大人に分かれて、パネルディスカッションをしています。あくまでテレビ番組なので、ある程度コントロールされたモデル的なものですが、意見の述べ方についても見ておいて、気になることや、いいなと思うことをメモしておいてください。

内容についても、クラス全体が理解を深めるために質問や賛意、反対意見などを出し合いましょう。

後半では、上のキーワードや考えて欲しいことに挙げた諸点から、特にこのクラスのみなさんに興味があることをピックアップして、グループに分かれて議論したいと思います。

2.7.2. 授業の展開

本稿が対象にしている授業は春学期に行ったものである。よって、受講生は、前年9月末の来日以来、大学のプログラムの一環として、また日常生活を送る上で、「日本人」とのコミュニケーションの経験を積んできている。そんな彼らの多くが「上級会話」クラスを受講しようとする動機として、「敬語」の知識獲得と運用能力の向上とともに、「日本人」らしい会話ができるようになりたい」を挙げるのは、彼らが半年間の日本での生活の中で、様々な「失敗」を積み重ねてきたからだろうと思う。その点で、第1回目の授業で受講動機を書かせたとき、一人の受講生が、以下のように書いていたことは印象的である。

(前略)「あ、日本語がお上手ですね」とかいろいろ言ってくれますが、それは日本人が優しいからだと思っています。本当に私は上手に話せるようになりたいです。

よって、授業では、受講生同士が、日本語だけを使って、留学生という同じ立場で多様なテーマについて話し、また筆者を通じて、一人の「日本人」の考えに触れ、それに対する自分の意見を日本語で述べるという経験をなるべく多く積ませることが重要だと考えている。

クラスでの活動は、上に示した配布資料の例にあるように、①映像資料(テレビ番組)のテーマごとに分けられた部分(15から20分程度 上の例では、番組のプロローグと「内向き」な若者についての部分)を視聴する。その際、議論の流れがよくわかるように適宜一時停止し、話されている内容について関連情報を補足したり、受講生からの質問に答えたりしながら見る。②予定部分を見終えた後、グループに分かれ、番組の内容(キーワードや番組内で出演者が話していた議論の論点)および、配布資料の「見ながら考えて欲しいこと」について、自分自身の経験を踏まえながら話し合うという流れで行う。

20名強のクラスなので、上述のように1グループを最大6名とすると、4つのグループに分かれる。筆者は、グループを回りながら、話し合いの様子(どのようなテーマで話しているか。誰が話し、誰が話せていないか。)を観察し、適宜、グループの中に入っている。グループ内の話し合いを引っ張る学生のいるグループは筆者が少し議論の方向を調整するだけで話し合いのサイクルが回っていくが、そうでないグループの場合は、筆者の方で話題を振ったり、質問を投げかけたりする必要がある。

①、②いずれの資料も、「日本の大学」、「国際人」といった受講生にとっては比較的身近な話

題であるので、筆者が配布資料で示した問題（見ながら考えて欲しいこと）について、自分の体験に引きつけた意見が出された。例えば、番組の中で、ある大学生が、留学によって、1年遅れることが大学生活にとってリスクだと述べていたことについて、リスクの裏にはチャンスを台無しにしているという考えや、自分たちが接している阪大の学生たちとの意識の違いについてである。

文字資料の場合もクラス活動の流れは基本的に同じである。異なるのは、文字資料の場合は、クラス全体での意見の交換が中心である点である。それは、文字資料を使ったのが、授業シリーズの終盤であり、それまでの少人数での話し合いでの経験を踏まえ、より多くの人に対して自分の意見を話す機会を持たせたいと考えたからである。授業の最初に資料の読み合せを行うが、資料が新聞記事であり、日本語学習者を読者として想定したものではないので、言葉や関連事項の説明に映像資料を視聴するとき以上の時間が必要になる。テーマは上に示したような考えに基づいて筆者が選んでいるわけだが、筆者の考えるほどには食いつきがよくなかった。授業では、受講生の出身国の状況などから始めて、日本での経験に即した意見を話してもらい、それをグループ内なり、クラス全体で共有化しようとしたが、あまり活発な議論にはならなかった。

そんな中で、一番活発な意見が交わされたテーマが、「恋愛観・結婚観」である。これは、「ヘイトスピーチ」を扱った回が、受講生の関心に濃淡が出過ぎて、また、話題がデリケートな問題を扱っていたため、クラス全体で話し合う雰囲気にならなかったからである。そこで、より受講生のような若い世代に身近で且つ関心が高いと思われ、また体験を元に自分の意見を話しやすいだろうテーマで話し合うことにした。ただ、「恋愛観・結婚観」といっても焦点が定まらないので、最初に「あなたの今交際している相手、または過去につきあった相手や理想の相手は自分より年下／同年代／年上？」という小さなテーマを設定した。

実際のクラスでは、「年上」グループにクラスの3分の2が集まった⁶⁾ので、当初想定していたグループ間の意見の交換という形にはならなかった。しかし、「プロポーズを男女どちらが行うのが普通か」と「男性が年上のカップルと女性が年上のカップルとはどちらが普通か？」という話題になってから⁷⁾、議論が活発化しだした。この二つの話題では、性的マイノリティの受講生を含め、自分の慣れ親しんだ「文化」から、具体的な経験に基づく意見が交わされた。また、意見は自国の「文化」と日本の「文化」との比較にも及び、筆者が想定していた以上の内容にわたる話し合いとなった。

資料を提示せずに行ったテーマで一番活発な会話になったことは、今後、「上級会話」を担当していく上で、話し合いのテーマを担当者の思い入れで提示することへの反省となった。思い入れが思い込みに流れると、受講生のニーズから遠ざかるからである。しかし、現在、受講生が生活している日本の状況について、授業を通じて改めて考え直す機会を提供することも大事だと考えているので、資料の提示の仕方に工夫を凝らすことにより、両者のバランスを取っていきたいと考えている。

Ⅲ. おわりに

本稿では、筆者が行った2012－2013年度春学期「上級会話」を題材に、「会話」授業について筆者の実践を報告した。

2010年発行の『会話授業を作る』（日本語教育叢書「つくる」）でも46個の教材例が紹介され

ているが、その中に、「上級会話」対象のものはない。これは会話に限ることではないが、日本語教育において、「上級／超級学習者」に対する教材開発や授業研究が初級・中級ほどには進んでいないと言えることの証左ではないかと思う。これは筆者だけではなく、日本語教育、就中、大学での日本語教育に携わる日本語教師に共通の思いだと思う。

筆者は2011年に『授業研究 第9号』において、上級漢字教育について述べた。数年来、上級学習者対象の授業を担当することが多く、自然、上級学習者に接する機会も多くなり、授業を準備し、実施する中で、いろいろ考えることがあった。今回、「上級会話」について一度まとめておこうと思ったのも、その一環である。

CJLCの「上級会話」はバリエーションに富んでいて、それぞれの担当者が、工夫を凝らして授業を実践されていることは、小南（2011）を読んでもよくわかる。そのような中で、筆者は、授業を通じ受講生が「伝えることの難しさ」を改めて感じられ、自分の意思が伝わるようになるにはどうすればいいのか考えるきっかけを提供しようと試みた。

「上級会話」はいろいろな切り口が考えられる。プレゼンテーションの技術を習得することも重要であるし、インタビューもできるようになればよいと思う。きれいな発音も必要だし、インフォメーションギャップを埋める方策を考えることも大切だ。会話授業の時間配分の中で、教師が説明に充てる時間はなるべく短いほうがいいので、自然、説明できることは限られる。筆者は、漢字授業において、「書く」ことを犠牲にしているが、会話では、限られた時間の中で、「敬語」の運用能力の向上を重点としている。これには、上述のように、受講生のニーズとともに、筆者が他の教育機関で「ビジネス日本語」を担当してきたことと、20年以上前に、一般企業の総務部員であったことが反映されている。ここ20数年の経験で、日本語の敬語は、大人が大人に話すときの型を学ぶための重要な要素であると感じているからである。

本稿の対象である2012－2013年度春学期を含め、3セメスターにわたり、授業内容の基本部分はずえに行ってきた。今後、「上級会話」を担当する際も、時間的制約はつきまとうので、特に、上級学習者にとって自分の意思を的確に伝えるための方策として、何を教授すべきかを再検討し、授業効果調査のコメントにあるように筆者の授業を選んでよかったと思われる授業を実施していきたい。

注

- 1) 授業に未だ十分には反映できていないが、敬語は言葉の問題だけではなく、非言語的な要素を加味したものであるという意味を括弧付で表している。
- 2) 「わかりあえ」することは必ずしも、議論が丸く収まることだけを意味しない。話すことで、互いの意見の相違、相手の立場と自分のそれとの距離感を知ること「わかりあえ」ることだと考える。
- 3) 「会話」のイメージから外れるが、論理的に話すことを授業の目標にしているので、あるテーマについて、互いに自分の意見を述べあう討論形式の授業となっている。
- 4) 配布資料には①説明事項を文字で表したもの②映像資料を見るための案内になるもの③文字資料（主に新聞記事）がある。その中で①は学習者が授業で筆者が話す内容を理解し、授業後、内容を再確認するために、口語体で書いたものである。話すときは、受講生の状況を見ながらわかりづらい言葉について、言い換えなり説明を加えて話している。
- 5) 文字資料は全部を授業で扱ってはいない。扱ったものは③、④、⑥、⑧、⑩、⑫、⑮、⑯である。

- 6) クラスの中に性的にマイノリティの受講生がいたので、それに配慮し、テーマ設定の時、性別を曖昧にしたためでもあるかもしれない。
- 7) 筆者が誘導したのではなく、会話の流れでこのような話題になった。

参考及び引用文献

- 金子広幸 (2006) 『初級が終わったら始めよう にほんご敬語トレーニング』 アスク出版
- 蒲谷宏 (2013) 『待遇コミュニケーション論』 大修館書店
- 菊池康人 (1997) 『敬語』 (講談社学術文庫版) 講談社
- 小林ひとみ他 (2011) 『N2 合格! 日本語能力試験問題集 N2 読解スピードマスター』 Jリサーチ出版
- 小南淳子 (2011) 「「五・七・五」で学ぶ上級会話 視聴覚教材としての映画選択における指標作成に向けて」
『大阪大学日本語日本文化教育センター授業研究第9号』 大阪大学日本語日本文化教育センター
- 斎藤善博 (1971) 『私の授業観』 明治図書出版
- 土岐哲他編 尾崎明人他著 (2010) 『日本語教育叢書「つくる」会話教材を作る』 スリーエーネットワーク

(はたの よしのり 本センター非常勤講師)